様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５７７００８７

研究課題名（和文）大田南畝長崎赴任の文学的意義について―長崎滞在中の詩作を中心に―

研究課題名（英文）The influence of Ota Nanpo's experience in Nagasaki to his literary activities

研究代表者
中島　貴奈（NAKAJIMA, Takana）

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３８０８０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、大田南畝が長崎滞在中に詠じた作品の精読を通して、約一年間にわたる長崎滞在中の体験が、南畝の文学活動に及ぼした影響について考察することにある。
　主たる研究対象は、「瓊浦八景」と「崎鎮八絶」の絶句八首の連作である。いずれも複数の伝本が存し、南畝にとって重要度の高い作品であったと考えられる。
　前者については、詳細な注釈を施し、南畝以前に長崎で作られた八景詩や、南畝の他ジャンルの八景作品との比較を行い、南畝の長崎八景詩の独自性と南畝にとっての八景詠の意義について明らかにした。また後者については、詩の使用語句等に、南畝が直接長崎で触れたであろう唐話の影響が見られることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Ota Nanpo(1749-1823) was a Literaly artists in the end of the Edo era.And he stayed in Nagasaki for one year as an official.
The purpose of this study is to illustrate the influence of Ota Nanpo's experience in Nagasaki to his literary activities.As a basic work of study,I made a translation and annotation of his poems,'Keiho Hakkei' and 'Kichin Hachizetsu'. Through investigation into 'Keiho Hakkei',the difference with the other 'Nagasaki Hakkei' poem was revealed. Nanpo used Chinese(Towa) expression for his poem 'Kichin Hachizetsu'. It indicate that Nanpo learned Chinese(Towa) through experience in Nagasaki.

研究分野：日本漢文学

キーワード：日本漢詩　大田南畝　長崎　江戸時代　唐話

１．研究開始当初の背景

大田南畝（1749-1823）は近世を代表する文学者の一人である。南畝は長崎奉行所詰の役人として、文化元年（1803）から翌２年（1804）にかけて約一年間長崎に滞在し、日々多忙であったにも拘わらず「百舌の草茎」「瓊浦雑綴」「瓊浦又綴」等多くの随筆類の他、二百三十首にものぼる漢詩作品をのこした。これは、南畝の平均年間詩作数の１．５倍近い数である。

南畝の多岐にわたる著述に関する先行研究は非常に多く、長崎滞在中の南畝の文学活動等についても、すでに濱田義一郎氏が「江戸文人の歳月―大田南畝」（『大妻女子大学文学部紀要』1983.5）において漢詩文・随筆等を引用し概略を明らかにされている。また、長崎滞在中に著した漢詩・和歌・随筆・書簡等のほとんどは『大田南畝全集』（岩波書店）に収録されて見ることが容易な状態にあり、それらを資料とした年譜も全集に収められている。

しかしながら、『大田南畝全集』に収められた漢詩の中には、長崎の地名を誤っていたり訓読に誤りの見られるものも少なくなく、なお十分に読解がなされているとは言いがたい状況である。濱田義一郎氏が論文の中で言及されている漢詩も二十首に満たず、これは全体の一割にも達していない。

応募者は長崎大学に赴任後一貫して近世長崎に関連する漢詩文資料の収集と注釈を行ってきた。特に昨年度からは大田南畝をはじめとする長崎を訪れた著名な文人たちの作品を収集し、読み進めてきたが、南畝の作品数の多さは類を見ないものである。

以上のような先行研究と応募者自身の研究状況を踏まえ、本研究ではまず長崎市内にのこる南畝の作品を改めて収集整理し、漢詩作品については全作品の詳細な注釈を作成することを目的とする。前述の通り長崎滞在中に南畝が作った漢詩は二百三十首にのぼっており、本研究の多くはこれらすべての作品の精読に費やされるものである。作品の中には江戸時代長崎の地名や風俗、渡来唐人についての知識なしには正確に読解することができないものも多くあるが、郷土資料を調査し、郷土史研究等の成果をふまえて完成させることができると考えた。また、注釈を施す過程で見いだされた疑問点についても、南畝の詩集の原本を確認するなどして『大田南畝全集』の翻字の誤り等を正していけるものと考えた。加えて、長崎という地での滞在が南畝の文学活動（特に漢詩）に及ぼした影響も少なくなかったと予想した。例えば南畝が長崎で作った漢詩には、しばしば唐話的表現（当時の話し言葉としての中国語）が用いられている。南畝は長崎赴任以前から唐話に興味を示していたことが指摘されているが、長崎の地で役人として唐人との交渉に立ち会ったり、実際に唐人と交流する中で聞き知った語彙を積極的に詩に取り込んだものとも推察されたからである。

２．研究の目的

本研究の目的は大田南畝の長崎赴任時期（文化元年 9 月～翌 2 年 10 月）に焦点を絞って、この時期に作られた漢詩作品の詳細な注釈を付し、さらに『大田南畝全集』（岩波書店）未収の長崎にのこる文学作品を収集整理したうえで、長崎における南畝の文学活動とその意義について考察するものである。

南畝は滞在中職務の傍ら長崎の名所を訪れたり、唐人たちと詩の応酬をするなどしており、漢詩からはその様子を詳細に窺うことができる。また長崎滞在中の作には唐話的表現（当時の話し言葉としての中国語）の使用が見られるが、こうした特徴は長崎での見聞と無関係ではないだろう。そして何より、生涯通じて長崎とそれに先立つ大阪赴任以外に故郷を離れたことのなかった南畝にとって長崎という地は詩趣をそそられる地であ

ったことは疑いなく、そうした点からも長崎滞在が南畝の詩作に及ぼした影響は少なくなかったと推察されるのである。

３．研究の方法

中心となるのは、長崎滞在中の漢詩作品の精読作業である。工具書はもちろん、電子化されている明詩や清詩、さらには唐話辞書等を用いて、南畝の用いた語句一つ一つの典拠を明らかする。南畝が長崎滞在中の事を綴った随筆等も多くあるが、これらも参照して行う。また漢詩に詠まれる事柄・地名・風俗等についても、実地調査や郷土史家の協力を得て詳細な注をほどこす。これらはすべて長崎在住という利点を十分に活かして行うことができる。注釈がある程度進捗した時点で、長崎滞在中の南畝の漢詩に見られる特徴や、その後の文学活動に与えた影響等について考察する。南畝の詩については先行研究も少なくないため、それらを活用して考察を行うものとする。

４．研究成果

本研究では主に、南畝が長崎で詠じた作品の中でも、「瓊浦八景」と「崎鎮八絶」の 2 種に絞って考察をおこなった。どちらも絶句八首からなる連作であり、自筆稿本が複数存していることから、南畝にとっても重要度も非常に高かったと考えられる作品である。

「瓊浦八景」についてはまず、南畝自筆帖本（加賀文庫蔵）の本文との異同を確認し、八首すべてに詳細な注と現代語訳を付した。さらにそれに基づき、南畝以前に長崎で作られた「八景」詩との比較や、南畝の他の「八景」作品について考察をおこなった。その結果まず後者については、「瓊浦八景」以外に南畝の「八景」を詠じた漢詩作品は見られないが、むしろ狂詩や狂歌といったパロディ作品に「八景」を用いた作品が見いだせることがわかった。この理由としては、当時すでに各地で量産され、読み古された感のあった「八景」というモチーフは、南畝にとって伝統的な詩題とはなりえなかったが、その文学的権威が揺るぎないものであったがために、パロディの題材としては格好の対象であったことが指摘できる。さらに前者の、他の長崎「八景」詩との比較に関しては、南畝以前に製作された数種の「長崎八景」あるいは「十二景」詩と、詩題や内容についての比較を行った。その結果、「八景」の選定（どの場所、どの題を八つ選ぶか）に関しては先行する八景詩に忠実にしたがっており、独自性は見られないことがわかった。しかし詩の内容を見ると、先行する長崎「八景」詩の多くが、目前の風景やその土地の特徴よりも、「八景」詩の元祖である「瀟湘八景」詩の情緒や、典拠を重要視しているのに対して、南畝の「瓊浦八景」は、南畝が長崎の地で見聞した実際の事柄や情景が詠み込まれており、その点で独自性を持ち得ているという特徴が明らかになった。この点は本研究の大きな成果の一つであると考えられ、雑誌論文及び学会において発表をおこなった。

次に「崎鎮八絶」についてはまず、南畝自筆と伝えられる絵入り「崎鎮八絶」との比較を行った。その結果字句の異同が見られた他、詩に付された画には非常に地味な、画の題材とするにはあまり適切でないと考えられるものが含まれていることから、絵入りの「崎鎮八絶」はまず南畝の詩ありきで作られたものであり、画は後から添えられたものであろうと推察した。

さらに、雑誌等での発表には至らなかったが、注釈と現代語訳を作成し、考察を行った。その結果として、八首はいずれも南畝が役人として職務に当たっていた中で目にした事柄が詠み込まれていること、そして詩の中には「打包」（包みにする、という意味）「幾秤」等の唐話的表現が用いられていることがわ

かった。これらは南畝が日常の業務を通じ、実際に唐人とのやりとりを耳にする中で得た表現と思われ、長崎滞在がもたらした特徴の一つと考えられる。

以上のように、本研究では南畝が長崎で詠じた「瓊浦八景」「崎鎮八絶」の考察を通じ、南畝の長崎詠に見られる特徴、さらには長崎滞在の文学的意義について明らかにすることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

中島　貴奈
「大田南畝「瓊浦八景」について」（『国語と教育』42 号　2017　p95-108　長崎大学国語国文学会　査読あり）

〔学会発表〕（計　1　件）

中島貴奈
「大田南畝「瓊浦八景」について」（平成 28 年度長崎大学国語国文学会大会、長崎大学国語国文学会　2016 年 11 月 26 日）

６．研究組織
(1)研究代表者

中島　貴奈（NAKAJIMA,Takana）
長崎大学・教育学部・准教授
研究者番号：10380809